様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：１６２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１２４５６

研究課題名（和文）アウトカム基盤型教育の評価指標としての精神科看護キャリアコミットメントの概念生成

研究課題名（英文）Concept development of career commitment of psychiatric nursing as evaluation index of outcome based education

研究代表者
渡邉　久美（WATANABE, Kumi）

香川大学・医学部・教授

研究者番号：６０２８４１２１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：精神看護学教育において臨床と大学が協働で活用する精神看護コミットメントの概念生成を行い、キー概念は『自己理解』に統合された。
この『自己理解』を目的に５概念が生成され、【１セルフケア看護・精神看護過程】で自身の生活をアセスメントし、【２ヒストリーと自己概念】で自分のこれまでの経験を振返り自己の価値観を確認し、【３対人パタンの自覚】により周囲との関係性の中で自分の強みや弱みに気づく中で【４自己存在の活用】により他者と関わる際に関係性に応じたケアリングを実践し、長期的には【５自分なりの精神看護への扉を開く】が深化していくことが期待された。概念別に評価指標として活用していく下位項目を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国の5大疾病の最上位が精神疾患である中、看護系大学卒業生が精神科に就職する割合は低く、対象理解の困難さから実習での困難感が高い現状がある。超少子高齢化が加速する地域で脆弱化する家族を支える視点を持つなど、質の高い精神看護の実践力を持つ人材育成が急務である。コロナ禍で看護学教育における臨床実習のあり方も一変し、やむを得ず看護学生の受け入れが停止する病棟も少なくなからず存在した。このような中で、精神科看護へのコミットメント導入を図る指標として、精神科看護師の臨床経験を有する協力者と現状に即した形で生成された概念は地域、病棟、学内演習など様々なフィールドで広く活用が可能である。

研究成果の概要（英文）：In psychiatric nursing education, a collaborative effort between clinical practice and academia resulted in the development of the concept of psychiatric nursing commitment. The integrated key concept was self-understanding. A set of five concepts was formulated with the purpose of nurturing self-understanding. The first, "1: Self-care nursing and the psychiatric nursing process," involves individuals assessing their own lives. Subsequently, in "2: History and self-concept," individuals reflect on their past experiences and reaffirm their personal values. Through "3: Awareness of interpersonal relationships," individuals become aware of their strengths and weaknesses within their interactions with others. Furthermore, "4: Utilization of self-existence" entails individuals actively providing customized care based on the nature of their relationships. Over time, it is expected that "5: Opening the gateway to one's own psychiatric nursing" will deepen.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神看護学実習　精神看護学教育　教材開発　質的研究　教育評価　自己理解　看護教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

1.　研究開始当初の背景

近年、複雑なストレス社会を背景に、我が国の精神疾患を有する総患者数は、急激な増加傾向にある。超少子高齢社会が加速する中、各ライフサイクルにある人々を対象とした精神疾患の発症予防から社会復帰までをカバーする精神保健活動の充実が求められ、その取り組みは社会的にも喫緊の課題である。精神保健医療福祉の領域においては、複数の専門職の連携により当事者支援が行われ、精神看護領域からの活躍も期待される。

これまで、精神看護領域では、入院病棟での精神科看護師や地域における精神科訪問看護師など専門性の高い看護実践を人々に提供し、また、卓越した精神看護の実践能力を有する精神看護専門看護師（CSN）を育成･輩出してきた。しかし、その一方で、看護系大学生の進路選択において、その特殊性から、卒後の進路の第一選択とする学生は極めて少ない現状にある。

現在の精神保健福祉施策は、病院から地域への移行が推進されているため、精神看護学の基礎教育における技術習得の目標としては、「医学モデル（医療）」と「生活モデル（福祉）」の両方の視点で対象を見ることが望まれる。医療では精神科医療と身体科医療を繋ぐリエゾン精神看護があるが、精神障害者は医療と福祉の両方のサービスを地域において利用しており、精神科看護の立場から福祉と医療をつなぐことのできる人材育成が求められる。

精神疾患患者が急増する社会背景に対し、精神科看護の専門的技術をもって対策を講じることは、精神看護学が担うべき主要課題の一つであり、generalist としての看護職が、地域精神保健の課題に関心を持ち、個々の対象への看護において、家族支援や地域社会での切れ目のない支援ができる看護アプローチを実践できるカリキュラムを構築していく必要がある。

現在、医療者育成におけるカリキュラム設計は、「プロセス基盤型教育」から「アウトカム基盤型教育」へと移行し、学習者が到達すべき目標を明確化するとともに、目標を達成できるような教育の提供を、説明責任を持って行うことが推奨されている。「アウトカム基盤型教育」では、学習者のコンピテンシーを見据えた教育プログラムと形成的評価が必要であり、各大学における独自性の高いカリキュラムが開発されている。また、看護系大学の増加や医療の細分化に伴う看護師のキャリア選択も広がりを見せていることから、看護を選択した学生により早期のキャリア形成に向けた情報提供などの働きかけも大切になる。看護師としてのキャリアの中では、多岐にわたる専門領域があり、スペシャリストが誕生しているが、精神看護学の基礎教育において、ラダー制度やキャリア開発に向けたガイドラインは十分な検討がなされていない。

キャリアとは、職業生活全体にわたっての自己実現の過程(山内、2004)とされる。キャリアを発達させ、生涯にわたり看護職としてキャリア形成をしていく基盤には、看護という職業そのものに対するコミットメントがなければならない。職業への思い入れの強さなどの情意を表す概念をキャリアコミットメントと呼び、キャリアコミットメントは勤続年数の影響を受けない(石田、2004)という報告や、就職後のスムーズな職場適応との間に関連が見いだされている(矢野、2006)という報告から、看護へのコミットメントは将来のキャリア形成の土台に位置付けることができる。職業への深い愛着形成がキャリアを発達させ、ひいてはキャリア形成の基盤となっていく。この考え方を、当事者への偏見が存在するなどの問題を抱える精神科領域の看護教育に援用し、精神科看護へのコミットメントを高める教育のあり方を検討することは、重要であると考えた。対象とのコミュニケーションにおいて困難感を抱きやすい精神看護の領域において、精神科看護へのコミットメントを教育の一つのアウトカムとして設定し、これを評価できれば、精神看護学の基礎教育の質向上とカリキュラムの改善に根拠データを提供することが可能となる。

看護基礎教育における技術習得については、精神看護学に限らず、どの専門領域においても臨床実習での経験が大きく影響する。学生は、座学や学内演習での学びを臨床において実践していくことで、看護者として成長を重ねていくが、実習の現場は学生向けに誂えられた場ではなく、未熟な初学者にとって、緊張を強いられ、初対面の人々に囲まれ、慣れない環境下で、失敗や挫折を繰り返しながら、看護を模索することとなる。そのような中での精神看護学実習では、臨床看護と大学の密な協働による学生への多角的支援が欠かせない。通常は、入院患者の看護にあたる病棟看護師が、大学の科目担当者の提示する実習目標をもとに学生を病棟に受け入れ、大学教員と連携しながら学生指導にあたっているが、精神科看護への志向性を高めることを目的とした教育上の取り組みはなされていない。

キャリアコミットメントは、組織を変わっても一生を通じて追求する専門分野への志向性をあらわす概念であるため、精神科看護領域において明確化することで、アウトカム基盤型教育や、臨床現場と大学間における実習成果の共通認識に活用することができる。generalist としての看護職が、何らかの形で精神障害当事者と関わり精神保健看護領域に関与する機会は今後、増加していくことが予測され、キャリア形成の土台ともなるキャリアコミットメントに着目し、評価可能な指標とすることは有用であると考えた。しかし、精神科看護領域において、臨床と大学教員が共通認識することのできるキャリアコミットメントの概念は明確ではない。

以上より、本研究では、看護大学生の精神科看護への志向性を一つのアウトカムとして着目し、臨床現場の精神科看護師と大学が共通認識することのできる評価指標として、精神科看護キャリアコミットメ

ントの概念生成を行う。

2．研究の目的

本研究は、看護大学生の精神看護学実習における精神科看護への志向性の評価指標として、精神科看護師と大学教員が共通認識することのできる精神科看護キャリアコミットメント(Carrier Commitment of Psychiatric Nursing：CCPN)の概念生成を行うことを目的とした。

3．研究の方法

本研究期間途中にコロナウイルス感染症対策のため、従来の臨床実習方法の変更を余儀なくされることとなった。

当初、CCPN の概念生成を行うため、精神科領域で精神看護学実習を行っている共同研究者と実習状況についての情報共有を行い、ブレーンストーミングにより病棟実習における課題を討議し、内容分析を行った。研究筆頭者が、精神科看護領域での臨床経験を有し、教育的立場にある看護職へのヒヤリングを行い、その結果に基づく素案を作成した。その案をもとに、合意が得られるまで検討を繰り返し、精神科看護師の意見を求め、臨床現場と大学間で共通認識できる概念生成を行った。

精神科看護においては、様々な理論や個々の考え方があるが、より普遍的に活用できる CCPN にしていくため、精神科病棟での行動制限や、地域精神保健まで、それぞれの看護職の経験知や専門性に立脚して自由に意見を述べてもらった。

なお、本研究期間にコロナウイルス感染症対策のため、従来の臨床実習方法の変更を余儀なくされることとなった。精神科病棟における学生受け入れに著しい制約が生じ、研究筆頭者の所属機関では、その間、精神障害当事者との関わりを保持するため、地域の福祉施設での実習を併用して対応にあたった。現場の受け入れ体制や教育側のマンパワー等の問題から、学生にとっての実習フィールドの偏りが生じている現状があり、最終的に、どのような実習フィールドでも活用することのできるものに抽象度を高めた。

4．研究成果

⑴ ブレインストーミングによる課題の洗い出し

各大学の地域性、病棟の病床数、強みとする特徴などから、課題の洗い出しを行い、実習形態は施設毎に異なっているものの、2週間の実習期間で学習効果を高めるため、【プロセスレコードを活用した指導方法】【指導者が看護学生に求める偏見に関する意識】【病棟レクリエーションへの学生参画のあり方】【保護室の見学実習における学習目標】【医療モデルと生活モデルの理解】【受け持ち患者の症状悪化時における実習状況】【福祉と連携した地域生活支援における看護の役割】を明確にしていく必要性が確認された。

また、地域移行が求められる中ではあるが、長期入院患者の退院支援に関する課題解決がなされない中での実習が実施されていた。様々な考え方や制約のある精神看護領域において、教員による教育・指導体制を含む【現場での連携上の問題】【指導者との問題意識の共有】【学生の発達課題と精神看護観】について、病院のみならず、就労支援事業所など地域系の実習施設と協働して、看護学生が体験できる事柄を列挙し、学習目標について意見交換を行った。

看護学生の学びに影響する要素として、【看護師と患者との距離の近さの実感】を感じながら、自己の実践に対して【患者の言葉によるフィードバックの手応え】【患者の肯定的な表情を見られる喜び】【生きてきた生活背景を強く感じた実習】などの評価・反応があった。指導環境として、【患者の人となりに関する情報提供の助け】【教員との患者像の共有】【ともに考える姿勢】【指導者と学生との関係形成】が学生の学習意欲を高めていた。学生の学びとして【気持ちまで寄り添うことが看護】【薬物以外の”人の関わり”による治療】などが挙げられ、倫理的問題への学びが今後の検討課題とされた。

⑵ 患者−看護師関係における治療的コミュニケーションの位置づけ

古典的理論の現代的意義について確認し、精神科医療の発展過程においては、無意識を前提とした精神内界を扱う治療を医師が担い、その対象理解を援用しながら、自我の保護、生活体としての環境への適応や成長を支援するケアを看護が担うという専門性を確立してきた流れから、「対象理解」や「自己理解」において心の構造論は、精神科臨床において有用であることが確認された。しかしながら、精神看護実践そのものを「治療的人間関係のプロセス」とするペプロウ看護論における治療の定義は、原点となりうるが哲学的、抽象的であり、初学者の学生の実習における実践においては高度な精神看護実践であることが確認された。

精神看護実践の基盤となる患者-看護師関係における治療的コミュニケーションを学習するにあたり、精神科看護師と大学教員が共通認識のもとで活用する教材を作成することが必要であり、精神科看護臨床で慣習的に用いられる「自分自身が、治療の道具として患者（対象）と関わる」ことを共通目標とした。

初学者が、精神科看護実践における「治療的アプローチ」との関連を理解するために、教育教材開発における具体的な構造化を検討し、便宜的に〈ラポール形成〉〈保護的・支持的かかわり〉〈自己理解〉

〈対象理解〉〈問題解決・成長発達志向的関わり〉などの段階的な分類を行い、実習において体験的に学習できる項目として、〈ラポール形成〉の段階では、《バイタルサイン測定》《身体接触を伴うケア》《整容へのケア》《水分・食事摂取の支援》《睡眠のアセスメント》《特技、趣味の開示》等とした。

(3) コロナ禍で精神科病棟実習が困難な現状に即した形で実習形態の見直し

従来型実習での「入院患者１名の精神障害当事者と援助関係を築き、セルフケア看護を主軸とする看護過程」の展開は、現行実習では困難な状況となった。このため、「精神障害者の福祉施設での当事者との関係形成」や、学内演習での「うつ病模擬患者のロールプレイ」などの実習プログラムへと推移し、さらに座学においても当事者の体験談などから学べる機会を増加させるなどの対応をした。これらの状況変化を踏まえ、CCPN の概念を集約する大項目を、【①自己理解：ヒストリーと自己概念】【②精神看護過程：健康増進としてのセルフケア看護】【③関係形成プロセス：パートナーシップ形成に向けた対人関係アプローチ】【④自己活用スキル：ケア対象への自己を道具とする存在の活用】【⑤体験からの考察：生命理念と精神看護観】とし、看護の独自性を探求する姿勢を評価軸とした。

細目の一例として、【①自己理解】は、短時間の関係では対象の全人的理解に限界があることから、精神的に負担のない範囲で自己との対話を行い、過去-現在-未来へとありたい方向を見つめる作業を行い、プライバシーの配慮やメンタルヘルスに問題がある場合は実施しないこととした。年表等を用いて人の歴史を整理して目的を定める〔目的論〕に位置付けた。【②精神看護過程】は、生活を整え自然治癒力（vital power）を引き出す養生の思想によりヘルスプロモーションの観点から健常者に光を当てる〔対象論〕に位置付けた。【③関係形成プロセス】では、対象のニーズに応じた困り事を捉えた協働への足掛かりを、対人関係論〔方法論〕と疾病モデル〔疾病論〕の知識を基盤とするなど、理論と実践の関係を学ぶ構成とした。

(4) **臨床現場と大学が共通認識できる**精神科看護キャリアコミットメントの概念

これまでの検討を経て、最終的に、自分を道具とする精神看護実践において、自分をみつめる作業を通しての『自己理解』が通底するキー概念として生成された。この『自己理解』を目的とする構成要素として5つの大概念が生成された。これらはプロセス性を有し、【1.セルフケア看護・精神看護過程】で自分自身の生活をアセスメントし、【2. ヒストリーと自己概念】で自分のこれまでの経験を振り返り自己の価値観を明らかにする。そして、【3. 対人パタンの自覚】により周囲との関係性の中で自分の強みや弱みが、どのような場面で生じ、自己や他者にどのように影響しているのかに気づくことができ、その中で【4. 自己存在の活用】により、他者と関わる際に関係性に応じたケアリングを実践していくことができることが望まれる。長期的には、看護者自身の精神疾患患者や精神障害者との関わり方は、自分を守りながら、他者と協働しながら、自分の良心に問いかけながら、失敗を繰り返しながら、変遷していくことから、【5. 自分なりの精神看護への扉を開く】が人生経験とともに深化していくことが期待される。

これらの大概念は評価指標として活用していくために、さらに下位項目で構成されており、段階的に発展していく「小目標」と「ケアの前提」と、5段階の「レベル」で構成した。一例として、【ヒストリーと自己概念】では、自己の価値観 Scope 、自分を俯瞰的に見る、対象の価値観に目を向けるといった段階的目標を提示し、ケアの前提として自己の価値観を明らかにする作業を行い、レベルごとのルーブリックを作成した。またこれらの学習を支援するホームページを作成した。

(5) 本研究の限界と今後の課題

臨床と大学の連携による精神看護学実習における CCPN の概念を活用した教育実践とその評価は展開できておらず、今後の課題である。

今回、コロナ禍での実習は、大幅に教育プログラムの再構築を余儀なくしており、これまで行われてきた「入院中の一人の受け持ち患者のセルフケア看護と、プロセスレコードによる患者-看護師関係の振り返りを円環させ、対象理解を深めつつ、援助関係を発展させる」という伝統的な実習形態に依らない実習方法を展開している。現代社会において、人間の精神や心を対象とする精神看護学は大きな社会的使命を帯びている。どのような教育内容を展開していくかは、精神看護学の教育に携わる者にとって大きな命題であるが、CCPN の概念が、今後、地域や福祉の現場や国の施策である長期入院患者の地域移行・地域定着に向けた取り組みやなど様々なフィールドで活用できるかどうかを検証していく。また、人類がこれまで経験したことのないデジタル社会に育ってきた学生への教育のあり方など、社会的背景に則した精神看護学の基礎教育を検討することも必要である。良くも悪くも AI が人類の未来を左右することが射程できる時代の過渡期にあり、IT を活用した教材開発とその評価も今後の課題である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 渡邉久美・蔵本 綾・長尾みゆき	４．巻 46巻９号
２．論文標題 コロナ禍での精神看護学実習における臨地との連携に関する振り返り	５．発行年 2021年
３．雑誌名 看護展望	６．最初と最後の頁 114-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	難波　峰子 (NANBA Mineko) (20461238)	関西福祉大学・看護学部・教授 (34525)	
研究分担者	林　知恵子 (HAYASHI Chieko) (30773858)	香川大学・医学部・助教 (16201)	
研究分担者	國方　弘子 (KUNIKATA Hiroko) (60336906)	香川県立保健医療大学・保健医療学部・教授 (26201)	
研究分担者	木村　美智子 (KIMURA Michiko) (70441988)	弘前学院大学・看護学部・准教授 (31104)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	岡山　加奈 (OKAYAMA Kana) (20549117)	大阪市立大学・大学院看護学研究科・准教授 (24402)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関